

アテナイの立法家ソロン

渡 辺 浩

A: 先生こんにちは。すっかりいい季節になりました。今日のお話はどんな人物ですか。

Q: アテナイの立法家ソロンといえば、教科書にもでてくる名前で、だれでも1度は耳にしているはずだね。

A: 法律とORですか。なんでもORに関係があるということですね。

Q: どこの国でも毎年何百という法律の改正案が国会にかかる——といっても、それらは全法律体系のごく部分的な修正をくり返しているというのが実情だ。法律の全体系を一新するなどということは長い歴史にも数えるほどしかおこらないし、それが矛盾のないシステムを構成して社会に受け入れられ、その活動の円滑化に有効性を発揮するとなると、これは最高度のシステム思考を含んでいることが前提となる。そのような一新がだれか1人の手にゆだねられ、彼がその任を成功裡にはたしたとなれば、われわれとしてもそれを無視することはできない。つまり前回、リュクルゴスを取りあげた観点からしても、どうしても素通りできないのがこのソロンということになる。

ところでソロンの生きた前7、6世紀という時代だが、フェニキア文字を改造したギリシャ文字が発明され暗黒時代も終わって歴史時代に入る、いわば、古代ギリシャのルネッサンスともいえる時代で、その時点をいつごろにおくかは1つの問題だが、ホメーロスはたぶん文字をしらないで、あの長大な詩を創作した。前700年ころの人と考えられる詩人ヘシオドスは、もう明らかに最初から文字を使って書いた。そこに歌われている農村生活は、もう原始的なものとはいえない。年代の確定という点では、オリュンピア競技の優勝者の記録を整理すると、前776年までさかのぼれることが、前5世紀にわかっていた。このころイタリア半島、シチリア方面に活発な植民活動が行なわれ、ついでそれはエーゲ海北部、ダーダネルス、ボスポラス両海峡、マルマラ海、黒海沿岸、北アフリカのキュレネー(キレナイカ)へと拡大する。小アジア沿岸諸島のギリシャ人諸都市は、もうそれ自体が新しい植民都市の建設に乗りだすほどに発展、繁

栄していた。しかしやがて植民地の拡大も一段落し、かわって対外、対植民地貿易が新しい繁栄要因となる、貨幣経済の時代がはじまっていた。

B.C. 600年以前のアテナイの状況についてはよくわかっていないが、かつて土地がやせているためにドーリス人の侵入を逃れたといわれるアッティカ地方は、耕作よりは牧畜にむいていたが、それでも都市国家の領域としては広いほうで、食糧の供給には余裕があり輸出しているくらいだった。またアテナイの陶器はギリシャ世界に名声高く、各方面に輸出されていた。しかし次第に商業が発達し、成功者がでるとともに失敗者もでて、負債の抵当として土地を失うだけでなく、奴隷の身として外国に売られる者も多いという情勢になってきたらしい。

そこでソロンという人物だが、生まれはアテナイでも一流の名門だったが、父が財産を消費して、豊かではなかったという。しかしプルタルコスにしたがえば、彼は若いときに貿易に従事したので金ばなれがよく、聖人君子というよりは俗人的な考え方の持主だったという。彼には詩才があり、いくつかの断片はいまに伝わっているが、政治活動の場でもその才を活用したらしい。アテナイがその海岸に近いサラミス島の帰属を、隣接のドーリス系都市メガラと争ったとき、軍事行動や政治的かけ引き、国際裁判の過程でその行動力、詩才、弁論術を発揮して大いに成果をあげ、名声をえたが、その後アテナイの内紛とそれに乗じたメガラとの間の2、3の問題の解決で、その名声はいっそう確立されることになった。

当時アテナイは住民の居住地域により左の山地党、右の平野党、中間の海岸党の3党派にわかれて争い、前述の状況で次第に緊張が高まっていた。借財の帳消しと土地の再分配を求める人々によって社会的緊張が極度に高まっていたとき、ソロンが監督官に選ばれ、調停役を委任されたが、それは彼が富者からも貧者からも自分たちの仲間と思われ、中間派からはその理性的判断力が信頼されていたからだった。一部の人々からは彼は僭主、すなわち独裁者になることをすすめられたが、僭主の地位の自分自身にとっての危険を十分にしていた彼は応じ

なかったという。そこで彼は第1に借財の帳消し、借財の抵当となっていた土地の解除、身体を抵当とする貸借の禁止を実行し、奴隷として国外に売られていた者の一部をつれ戻した。しかし彼は土地の再分配は実行しなかった。借金によって土地を購入して利益を受けた者もあった。しかし彼は左右のどちらの党派も十分には満足させなかった。両派は当初の期待を裏切られ、不満をもつようになったが、しかし改革の結果社会の活力が増大し、まもなくみなその利益を認めるようになった。やがてソロンは当面の改革問題だけでなく、国政と法律の全面的な再編成を一任されることになった。

彼はまずそれまで施行されていた極刑主義的なドラコンの法律を廃止し、つぎに市民を資産によって4階級に区分し、第3階級までの市民に官職につく資格を与えた。第4階級には民会や裁判への出席の資格が与えられたが、法律の条文を少し不分明に書いたので、裁判所の重要性は高まったという。彼は従来からあった長老会議的なアレイオ・パゴス評議会と別に、4つの部族から100人ずつを選んで構成する400人評議会を設置し、民会にかかる議案を事前に審議させた。彼の定めた法律は広範にわたり、そのなかには独特なものも少なくない。党争で中立を唱えるものは公民権失格、というのは無関心派の発生を抑止する必要からだろう。市民は毎年各自の所得を申告し、正当な手段によって生計を立てていることを証明しなければならない、というのはすこぶる現代的にきこえるが、ヘロドトスはこれはエジプトのアマシス王の法律をとり入れたものだという。外国人のアテナイ帰化は永久亡命者、または一家をあげての移住者にかぎって認める。というのは、永久的移住は歓迎するが、出稼ぎの労働力の流入は抑制するということらしい。技術を習得させられなかった子供は、親を扶養する義務なし、オリーブ以外の農産物の輸出禁止、……とみていくと、勤勉の奨励、産業の発達、労働力の流入、産業教育の重視、人口増加にともなう食糧の輸出国から輸入国への転換、などの経済情勢や政策をよみ取ることができるだろう。そのほか、結婚、遺言、祭礼、女性の外出、等々、多様なきめこまかい法律があった。

これらの法律を全部100年間有効として公布したが、彼のところには毎日いろいろな人が押しかけて、あの法律はよいがこの法律は修正すべきだとか、あの条文の意図はどういうことかと問いつめるなど、いちいち応接することもできなくなり、10年間の予定で外遊に出かけた。まずエジプトにいき、高名な神官についていろいろと学んだ。後世プラトンはこのときに、ソロンが神官か

ら、沈没した大陸アトランティスの話をきいた、としている。またキュプロス島にいて、昔テセウスの子でトロイ戦争に出陣したデーモンが戦後建設し、その子孫が王として支配している都市を訪れた。それは要害の地を占めていたが、ソロンは眼下にひろがる平野に都市を移すようにすすめ、自らその設計と建設の指導にあたった。新しい都市はソロイとよばれ、地の利をえて発展し、近隣都市の羨望を集めた。小アジアのリュディア王国の都にも足を伸ばすが、ここでの話は次回にまわそう。

彼はギリシャ7賢人の1人に数えられ、その格言は神殿や街角の標石に刻まれて、後世に伝えられた。「汝自身を知れ」、「度をこすな」、「支配されることを知るものは支配することができる」などはソロンのものといわれる。「生きているかぎりは学ぶべきであって、老年が自然に思慮をもたらししてくれるわけではない」はプラトンが好んだもので、なんどか引用している。

ソロンの不在中アテナイでは再び党派争いが盛んになり、帰国した老ソロンにもうそれを抑える気力はなかった。山地党を率いるペイシストラトスは労働者大衆を味方につけ、他方ソロンや他の2党主に対しても慎重な姿勢を示しながら、やがて決定的に大衆の心をつかみ、民会で身辺護衛隊の公許を獲得し、前561年にアテナイの政権を奪って僭主となり、対立派は亡命した。このあと前510年までの半世紀、アテナイには彼と彼の息子たちによる僭主制がつづくことになる。

A：しかしそれではソロンは社会システムの設計者としては失敗者だということになりませんか。

Q：政治形態の意味ではそうだろう。しかし彼の法律の大部分をペイシストラトスはひきついで守らせ、ソロンに対しても形のうえでは敬意を払いつづけた。このためソロンは立法家として名が残ることになったし、前5世紀のアテナイの人士は、アテナイの繁栄の基礎を築いたのはソロンである、と一致して認めていた。

A：法律についても意外に古い歴史があるんですね。

Q：この時代はギリシャ各都市で新しい法体系の導入された時期にあたるらしい。アリストテレスはリュクルゴスとソロンの2人のほかに、法律だけの制定者として8人の名をあげている。ギリシャではこれ以前にさかのぼることはいまのところむずかしいが、最近のメソポタミアの膨大な契形文字粘土板の解読の進展状況からすれば、いずれはさらに1,000年さかのぼって、古巴ビロニアのハンムラビ法典のシステム論的意義などについて論ずることができるようになるかもしれない。(つづく)

(わたなべ・ひろし 筑波大学社会工学系)